

# 京座筋書

特 54

22



東京國書



頃から鐵様が關取の事を思召て度々の私へ御頼之何卒願  
ひを叶へてたべと取持お民が詞を打消角力家業のて居  
れど道にかけたる事をせぬので諸方で最負に成五郎藏若  
大旦那様に知れる時の翌から出入を止られる事必ず御斷  
申升と最潔白成挨拶な一木戸口へ入にける跡見送りて下  
女娘世間も稀な關取さんあの心根が感心と譽そやせ共空  
へ向つてを打と同じ事取附島も奈良酒や兒の手柏やか  
ぼて氣も只打たはれて居たりーが往來群集の其中を詞争  
ひをや々と人押分て来りーの進藤野守之助また一人の町  
奴の幡隨長兵衛が子分にて巢籠りの鶴吉社内に来り進藤  
の子分の巢籠りを地上に敷居コリヤ下郎己人込の中どの  
武士たる者の足を踏み詫をせぬとの不屈至極手討にせん  
と罵れば子分の少も應ずる色無いかにもこなたが望み  
ど有なら爰で討れて死にも仕様が今町奴で名の賣た幡隨  
の子分の者が只打れたと云いれちやア地獄へいつて閻魔  
の前へ云譯ねハ試合の上で尋常に手練で双方打と仕よ

ふと支度整へ立上既に打合其所へ門前を走り来る幡隨長  
兵衛が弟分唐犬權兵衛中へ飛込先暫らく私へ御預け被  
成て下されと立派な男の挨拶に兩人志をためらひーが  
や、有て野守の介シテ預ると云其趣意の別に趣意の何よ  
も無がこんなつば野郎をバ切て仕舞がむだ、から夫で  
わつちが止たのだ相手の立派な御侍又片々の素町人六ヶ  
敷事をいわねへで只預て御くんなせへと男一疋唐犬が詞  
もいつうな用ひぬ進藤名うての扱ひでもこやつ助け  
遣のせぬと根強き詞に唐犬も去ば是切モウ詫ぬ此八幡の  
境内を勝負の場所となした上命の遣取仕様かど双方支度  
整ひて互ひに構へる白刃と白刃立上らんとなりたる折柄  
あわて、飛込木戸口を出り行司庄之助御二人様の争ひ  
の譯の知らぬが今爰で命の遣取被成て御兩人の能ふが  
此大入の御見物様が上を下への騒ぎにて必ずお怪我を被  
成の必定夫でいかにもお氣の毒ゆへ爰の道理を御承知  
有て一旦扱たお刀のわー預けて双方へお納被成て下さ



らバ第一今日の御見物又二ッにの勸進帳元並びに掛りの  
者迄が助かり升る事故に何卒御照濟を願ひ度とひたすら  
扱う行司役實に尤も兩人の然らバ此儀引別れ行司に双方  
預け様と流石達師と白柄組右と左りへ別れ々に皆、木戸  
へ入跡にホット一息庄之助も事穩かに納りーを悦び勇み  
行過たり早番數も取、に片や黒鷲片や櫻川と名乗を上る  
其折の境内一統鳴渡り大川筋の魚さへ通る斗りの騒ぎ成  
早程もなく立上る勝負の程ぞいさましくどつといつたる  
どよめきに中入の結びも濟いつたん表へ出る客の打人波  
のエイトウ、押合へ一合出乍櫻川が勝た櫻川とやとエイ  
トウ、口、に其勢ひの恐ろーさ續ひて出る唐犬權兵衛巢  
籠吉極樂十三間魔の大助地蔵の三吉彦守の團六かた福  
の辨次不忍の連藏其外子分數多引連跡を附添櫻川皆口、  
に今日の角力の能取たあの黒鷲に勝上り町奴の肩身が廣  
ひ能投てくれた譽れじやと子分の者の勝祝ひ櫻川のやた  
悦び是と申も幡隨親方を始めとして皆様の御影成と述

る禮さへ肩身も廣く唐犬投たる煙早入を當座の花は櫻川へ渡りて一統勝祝ひに淺草並木の料理店巴屋差て行跡に黒鷲官大夫出来り見送る所へドヤ、と白柄組の大勢来る黒鷲の左右を取巻己前に櫻川の僧同様手も無ど高言を吐乍負と成りの何たる様と大地へ埋む悪口雜言再び出入の相成ぬと立腹して歸りける黒鷲何と詮方無思案に暮後門弟湯巻黒骨雲の輩無念乍も立出て關取が屋鋪の出入が叶わぬからの早是送此意趣返りの惡案が有は此三人が師匠は替り急度敵を取升ると弟子の義強く詰寄ば黒鷲の手をこまぬき所詮出入を止られたれば此上の手前達にも言合す事こそ有と互ひ互ひと可く意趣返りの其言合せも散花の心の空の櫻花無念こつたる黒鷲が後の恨みを合を幕二幕目淺草待乳山下今戸橋之場前幕の晩の事にて夕刻を降出す雨も夜に入ての往來の人も稀成橋場道我家へ戻る櫻川の八橋の場所刻て唐犬始め子分の者と巴屋にて酒汲かわ深夜に歸るを唐犬が子分に供を言附りの出ツ尻

の清兵衛逆氣轉氣輕な性質に臆病者と仇名も呼を面白半分子分等が櫻川を送らせ又連立來る折柄に降出す雨に出尻は傘一本に二人で濡るを厭ひ櫻川も傘を渡して山谷堀成知邊の方へ借行跡櫻川の出尻の臆病者を承知せる故待合さんと成折に後ろに伺ふ黒鷲官大夫門弟三人顯り出待兼櫻川今日の勝負に負と成りを白柄組の連中が立腹なりて今日限出入を止むと斷いられたる上からの翌から場所へ出られぬ黒鷲勘云恥をかけたのも皆己れ方起り一幸ひ降出す雨空に心の關の待乳下更て往來も中洲方堤も霞む狐火や狸囃子を聞乍命の遺取仕様から覺期をせよと一腰を抜玉散氷の刃斯言事も有んかと花川戸の衆達を送つて遣うと言れたも斷り言て爰迄來たの此待伏を覺期の前いかも命の遺取せんと双方立會龍虎の勢以後も伺ふ三人の門弟共も有合す竹鎗手に手に携へて息込無て居たる内一肩打込切先に黒鷲ハット倒るゝを又も切込其所へ門弟三人一時に突出す竹鎗事共せず何なく皆々切

倒一ホット一息つく所へ傘を借受出尻のいそ々來り此体を夜目に見遣て胸り爲わな々震へる其内に見咎められての一大事と櫻川の逆行たり言合さねど進藤の吉原土手方此所へ胸に一物若やの様子伺ふ待乳下關に死骸に爪突て合點行すとためらうを出尻も驚きて互ひに伺うを慕三幕目橋場櫻川住居の場此場の前幕の翌朝の事にて相長家の者共同家に集ひ夕べ淺草今戸橋まで人殺しが有り由段々世間の様子を聞く角力黒鷲官大夫と弟子が四人切殺れどこの内も仲間の事掛り合での御座らぬかと口々言を聞老母其鳴の今初めて悴の昨夜更て戻り又今朝早く起佛參に趣きしがよもや掛合での有間じと思へど老の取越苦勞案事が常子を思ひ又子の親の事をのぞ思ふ孝心櫻川ふさぐる胸の晴やらす腕こまぬひて我家の門今佛參を戻りと言顔色の能らぬの若や氣分が悪敷の無かと案事る老母に打向ひ昨夜花川戸の衆達と夜更迄酒汲かわ一夫故今朝へ持越て何となく氣分惡敷夫で顔の色も惡敷

必ず氣遣ひ遊ばすなと口には言と胸の内をせんと面に顯はれて何と詮方無所へ又も長屋の者共が今戸橋方戻り掛せや々と内に入お袋氣遣ひ致されな黒鷲を切殺りたの何者の仕業かと噂をせしが死骸の傍に證據に残り煙草入の花川戸の長兵衛が弟分で名の賣た唐犬の權兵衛が昨ら迄提て居たる煙草入と言事だ儘に知れて御上へ上り今方唐犬へ繩目が掛り自身番へ引れたと皆噂をして居るゆへ一寸此事お咄し申案心させて置うと思ひ寄せりたぞと口々に言捨我家へ歸り行跡の親子の水入す聞五郎藏の胸の内我故無實の難に逢ひ唐犬殿が繩目の恥いつそ名乗て出様りと思へど夫での親への不孝然し此儘居る時の上の咎めを受けるの必定どうしたものとつ退つ心の矢竹娘氣の掛放れていそ々と門へ來掛る伊世屋のお花赤らむ顔を押し隠し物もエ言ぬおはば氣に老母の見附伴ひて朝早くお嬢様に何れへ御出遊ばすやと問れてお花の思ひゆげに實の今朝金龍山へ參詣と偽りて御堂の内にてお民をバ

淡島様へ折鶴を納めに遣し其暇に此橋場迄来り一の口比  
思ひを掛たり一櫻川殿が忘れず押附乍参り一が何卒今  
か水仕に成どお傍に置いて下され度と未二八にも足ぬ子が  
ませた詞に引替て身の潔白成櫻川親旦那様に大恩請其  
か嬢様に私分亂らな事を致す時の御出入の叶ぬ道理増  
て年も半分余取居櫻川是の斷言升ると斷のられたる挨  
撥に何と詮方注斗り始終立聞家主空兵衛欲に眼もきよる  
々と店子騒動尋ねてける折柄味ひ酒呑んと其扱ひを任  
て吳と幡隨院の長兵衛成ぬ橋場の大家の顔役が中人せん  
と扱へど櫻川が潔白も取附島も無りける心當りをそこ爰  
と尋ねて来る下女のお民と共々に空兵衛扱ひか花を伴ひ  
母親が藏前へこそ戻行櫻川の胸の内猶豫せば御上必  
ず重き咎めが有んと有て訴へ出る時の跡にてたつた一人  
の母が氣を揉死に死ぬの必定いつそ唐犬親分の罪を救う  
バ今爰で一部始終を書殘し死ぬ方外の事を無と書置殘し  
切腹なす門へ長兵衛入来り跡の仕末を引受る件にて幕

中幕内藤家足輕部屋の場此部屋頭と言るの太郎兵衛連年  
も重みて年来の出入をなす親方株今日御上へ御大老の井  
伊掃部頭檢御入来にて供の者共いそがしく同じ足輕九郎  
兵衛四郎助屋敷の内外の掃除も濟せ部屋も歸りて晝飯の  
支度と手に手に茶や米のいぎ豆も敷も男業心置なき足輕  
の其氣さんじの外に無銘酒の名に退翹菱に菊水を買ぐ四  
方の丁稚三太の徳利樽を提御用を聞に入来る是と一所に  
連立の菜賣か傳書物の物如何やと詞終らぬ其内にチ  
待兼たと立出る足輕に一んの味煮八幡巻鳥賊の奏附と  
品々を並べる姿を取巻足輕各采を求むるに酒屋の御用も  
日比から一の得意の足輕部や御用の酒を承まわり商人戻  
る折柄よめそこで一升茲で二升と前町の居酒屋にて前後  
忘脚せ一程に酒にたわひも内藤の此足輕部屋に住才助と  
言る者朝の掃除の濟ざるに何れへ行くと仲間の者氣を操  
居たる其所へ足もひよる酒機嫌どつかりと部屋に座し  
酒氣に堪兼息をつき大きに遅刻といふ詞を聞も遅いと左

右へ詰寄是才助己の何所へ行居た上の御用も仕切れぬに  
見れば例の酔体前後も譯らぬ此有様夫での上と役頭へ  
濟まへどよと怒りの詞此深節も日頃うら同じ部屋成足輕  
仲間身の爲思ひ言るも流石年嵩部屋頭才助の馬の耳  
風に吹れてすやよと眠るに人々おされ果扱見下た香倒  
れと顔見合せて詞無折柄爰へ入来るの内藤家の用人平岡  
治右衛門供がたすそら腹登に麻の上下又衣服を揃へ足輕  
部屋に入来れを皆驚き平伏爲是の何御用にて御用人様  
に此所へ御出有と面を得上す言上成バ余の義にも非ざ  
るが今日上へ御大老たる井伊侯御入来有り一に付爰に一  
事困難成り御大老に殊の外成御大酒よいらせらるれば  
今日の御酒宴に御相手致す者無故如何のせんと評議たら  
し然るに足輕才助事の性來大酒を致す由前町の酒店に  
置専ら噂致す故其量を聞合すに二升三升呑連も事共せぬ  
由承り近頃屈竟の御相手成と只今上方衣服上下を如斯  
下されて其お相手に出さんと某迎ひに参りたりと出す服

盞見る人々胸り無て片隅に寐たる才助ゆり起せを白川夜  
舟で寐て居るに何の用かとのふやき乍目をこすり乍起上  
り見れば用人平岡故漸く頭を下委細を聞て胸り爲他の  
足輕に打向ひ日頃我事を呑倒ると悪口言いが今日こそ其  
大酒が役御大老の御相手出来何と肝がつかれ一ならんと  
其高言も廻らぬ舌所謂くだに足輕共手に汗擲り居たり一  
が早御大老の御入と知らせに平岡立上りイザ身共と来ら  
れよと案内に連れられ立上る足もひよる千鳥足酒が御役  
に立て行此件にて無盡廻る  
同内藤家大廣間の体亭主内藤紀伊守出向に入来るの大  
老たる大老井伊掃部頭直孝設けの席へ附玉へば内藤初め  
諸臣等の一禮終り用意せし酒肴を運ぶ小性木村采女同杉  
浦主水御前へ珍味取揃へイザ一献きこ一召と三寶に積上  
一六盃の三ツ組の是ぞ當家に傳來せ一升入に七合入  
五合入の名器にて五合入を取上玉以波と呑干て亭主に  
差内藤の生得下戸の拙者故此大盃の受難一と言上なす

と余義無て小性に差ど皆一統大益成故受兼て御免を願へ  
バ大老の最御不興氣又思召と切角今日の御馳走に此益を  
請られぬと近頃残念至極成誰ぞ相手の無かいらぬと待  
間程無次の間方平岡治右衛門入来り其御相手を御次迄召  
連れて来り一故御目通り願ひ度と言上成バ大老はその幸ひ  
成事かな目通免す御亭主方御招き下された一と直様是へ  
主人が詞足輕才助ゆうと以前の上下に衣服を改め細  
看板に引替て霞小紋の荒くれ男盛障りも荒く敷憶する氣  
色中の間方末座へこそ進み出平伏成ば待兼一井伊侯件  
の盃取上才助に差給え打ホ、笑て頂戴成ぐつと一口呑  
干に見る人々の胸りなす是方數献汲かじ一井伊侯才助憶  
する色無さへつ押へつ成内に才助が面見遣給ひ何か一物  
大老の才助に打向ひ其方が眉見に残る疵は何れで受たる  
ぞと尋ねに才助心附是の先頃前町成居酒やへ参り一時  
酒に酔て轉び一時敷居で眉見を打割一其疵が残り一と言  
を大老打消てイヤ左も非ず汝が疵の戰場に於て受たる疵

と此掃部の見請たりとのつ引成ぬ大老の釘を差たる一言  
に才助今の詮すべ無然らバ名乗申さんが誠我疵の酒店に  
て打割一疵に非ず誠の先年關ヶ原大坂兩度の合戦に戰場  
みて請たる疵甲陽方又其名轟く馬場美濃守信房が男同苗  
三郎兵衛信久成と忽ち變る猛威の有様一座の人々思ひ掛  
無事共に驚き入てを見得にける大老増益興に入予も其折  
の赤備に汝と出會事有と過一昔の物語り打ッ打れつせ一  
事方苦戦をなすも今の早御世治ッて咄一草嚙甲陽にての  
無念成んが是も時節と徳川の威光に敵たふ事叶わす是非  
無事と信久の歎息の外なかりけり井伊侯の酒氣に乗ト今  
日馳走の肴として此信久を賞ひ度と無理難題を言掛られ  
如何のせんとためらう内藤信久の進み出此身に取て榮譽  
なれど今當家の抱へにて御所望連も御大老の御家臣に  
成難一なれ共節角の御好まをもどく主人も御困故拙者  
と御大老立會爲此所にて勝負をなさんと双方急度身構無  
鎗劔の試合よて既に大老危うかり一と思ひを斷れ其儘に

御歸邸あり一件にて幕

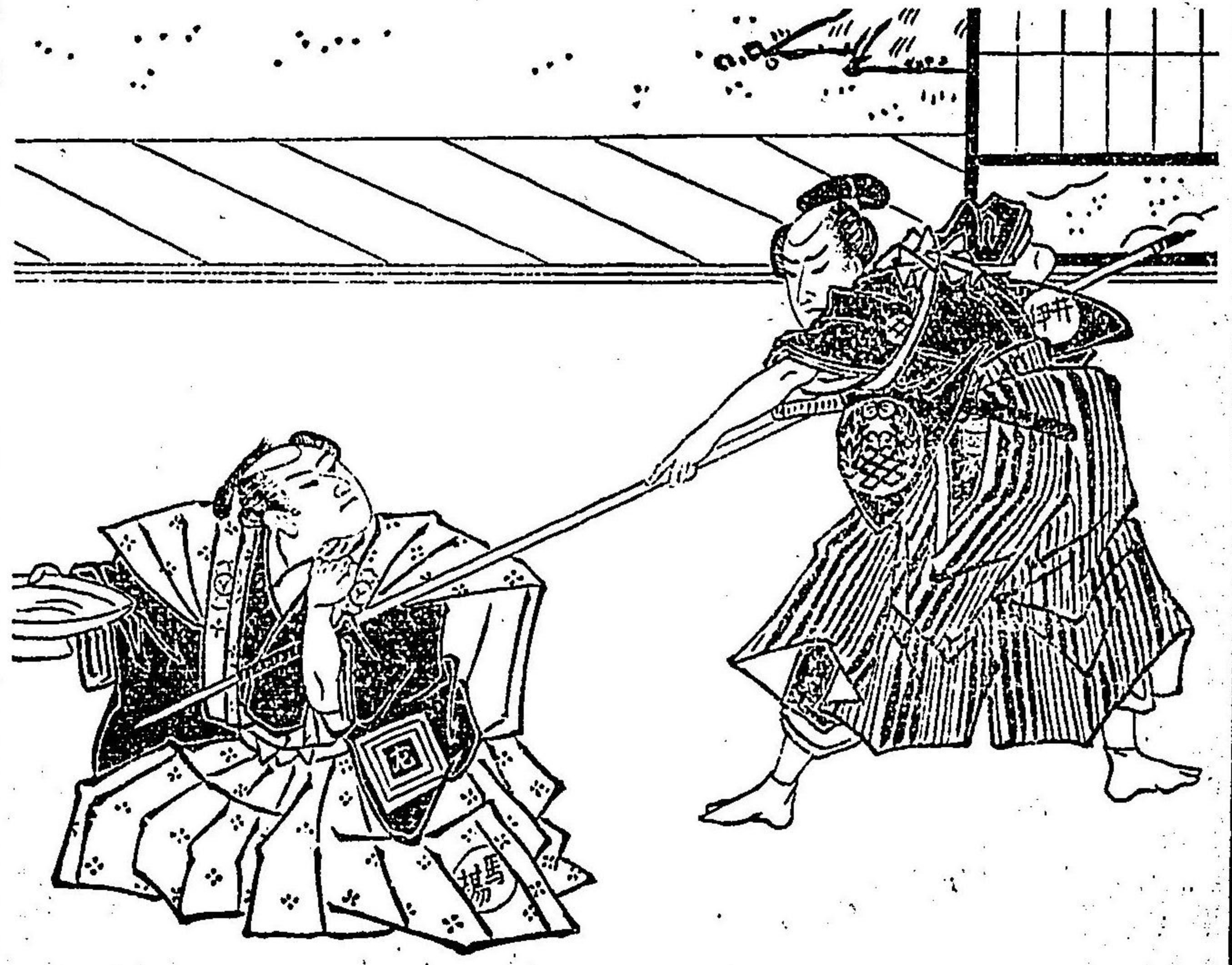
中幕支那物語同國蓬萊宮之場表門前に下官の唐人立番爲  
噂さを成の先年此土へ日本方遣唐使に渡來な一たる安部  
の仲磨といある留學の爲此土に渡り名を朝衡と改めて官  
士の數に加わり一が流石の遠き波濤を越學問修行なす程  
有て晝夜分たず勉強成忽ち衆に勝れ一故玄宗帝の御意に  
叶ひ月に日登庸な一既に左補闕の官位に昇り國政に迄  
關係な一豫て安録山が四百余州を掌握なさん企に邪魔よ  
成故楊國忠公が密計を廻らされ然も八月十五夜に月見の  
宴と偽つて凌雲臺の高樓へ一人殘りて階子を引通路を斷  
バ仲磨も翼なけれバ日を追て竟に餓死な一たるを誰知る  
まいと思ひの外彼が家來の羽栗吉滿此事を存知居て密か  
に日本へ歸國な一つふさ注進致せ一故此度遣唐使吉備  
大臣此土へ渡り其罪條を正さんと先詳而方應接有て最早  
今日等の手切とならんと門前にて大評議早唐使の出張な  
らんと達一に警固の諸臣等も威儀どう々と扣へける所よ

て舞臺一面蓬萊宮大廣間應接所の休總督安録山の位官正  
敷席に附續ひて副總督楊國忠其外諸臣席につらなり待間  
程無入來るの遣唐使吉備大臣冠り裝束ひとやかに近臣附  
添出來り設けの場所に座席な一是迄數會の談判に仲磨を  
餓死させ一其罪も謝せず一て權威を以て言成り以ての外  
なる致一方當國に仲磨死一たる證據無と雖共則臣下羽栗  
の吉滿が注進し依て明白なり又夫も証に成ざるといわば  
我元龜元年五月孫興進泰怱斯の二人が唐使として來朝せ  
一時右大臣河原が館に於て饗應な一詞工を以て仲磨が横死  
の趣尋ね一は彼包む事能あず一て實事を告て共々に賢明  
の臣が死をいためり斯る證據の有上り其罪謝して和を乞  
か且の乞ざるかと辨舌水を流すが如く煙み掛て問ければ  
答へに何と詮方も安録山楊國忠も早是迄此方方の和を乞  
ねバ兵端を開く共苦る一からず四百余州の大國へ日本位  
の小國が攻來る共恐る、事な一早今日が手切成と双方立  
て威氣猛く大臣席を去んとする折柄一間に聲有て遣唐使

止むるに當國の大將軍吳懷寶衣冠正敷席に附左右の争ひ  
 左こそと存する去々今兩國の間に兵端を開き勝敗成り宜  
 敷からず仲應餓死させし事詳かに承知の上の此度の和を  
 乞て世も平穩な陸合事を斗るが感要成と此扱ひに大臣  
 の元方事を好まざる大腹中の遣唐使の即問の挨拶に一國  
 和して穩りに治まる國を祝す爲一献汲んと取出す酒肴の  
 山海魚肉の珍膳其もてな一に立出唐女玉蘭吉備公へ酌  
 なす酒の毒成を知て外成毒なき品を酌なさんと酒つぎへ  
 手を掛んとなすを此酒公へ差上よと差圖も玉蘭もどき難  
 く大臣へ差と見得一が我手に毒酒を呑干ば忽ち苦敷有様  
 に扱ひ毒酒を我を救わん今の乙女が身替成か不便の者  
 よと胸中に深き思案の吉備大臣録山の一禮な一乙女が不  
 禮の詭言成公に和漢の書籍に眼をさらし何開からぬ事  
 無由當國も秘有一書の詩誰有て讀得る者無公の博學多  
 才の聞へ外國迄も轟けば何卒是を讀玉のれと有合盛へ取  
 出たる一書を見るに是のいかに讀得難き一書の表今此

書物を讀得ねば我日本の恥辱ならんと如何のせん心  
 にとつおいつなす其折に不思議や一定の蜘蛛來り件の書  
 物の上に履ひ縦横に歩行けるに大臣篤と目を附玉へば廻  
 して讀終りの文字の上にて形消行衛知れずと成にけり  
 不思議成事かなど蜘蛛の歩行に習ひて讀に速かに讀終れ  
 ば人々のあきれ果驚く者こそなかりける是にて敵對手立  
 もなく輝く威光りん々と歸朝の途に附大臣を警固の軍艦  
 海岸に打祝砲の出帆に日本差て波靜か歸國なす件にて幕  
 大切淺草花川戸幡隨内之場前幕櫻川切腹の日々七日過  
 事にして當家幡隨の子分關魔の大助地藏の三吉齋守の段  
 六かた福の辨次不忍の運藏の町奴共手に々藏前八幡の相  
 撲の勝負の噂をな今日角力太鼓が廻つて來たが此間の  
 一件の場所もあれ切休業なり、が漸々事濟にて翌月初  
 と見ゆるが此勝負附を見るに附殘念なり櫻川三年跡と鈴  
 ヶ森で親分に助けられ夫から入間川關の弟子と成段々出  
 世した上で此勢ひで此冬場所の關脇にもなられよふと

樂んで居た甲斐もなく折角最負にいたものを夫も附て  
 も黒鷲の能氣味で有たなど最負の肩を持つのが口々噂する  
 所へ戻り來るの長兵衛が女房の時悻悻長松を子分出尻清兵  
 衛に脊負せ櫻川の母と連立我家へ歸り來りける子分のも  
 のの出迎ひて四方山の咄の内實は光陰に關守なく月日  
 のたつひ早ひもの最今日櫻川が初七日にて佛參せしが  
 實は夢の如く成浮世の中と我子の事思ひ出す度目に持泪  
 母の心を不便なれ其母親にも増りたる同ト心の奥村主膳  
 水尾の家にて二代勤むる忠臣無二の家老ありしが門口か  
 家内に連上座へ通をば子分共水尾と聞て立掛り既に打擲  
 なさんず勢ひ興と聞居る極樂十三も同ト氣早の若者に立  
 腹なすを立出る長兵衛是皆の者不禮で有ふと一統を止む  
 れハ鶴の一聲小鳥の子分の實と尻込拍へける長兵衛主膳  
 に兩手を支へ水尾様方御名代の何用様御用成かど詞に主  
 膳の席を改め拙者主人の身の上に附御頼み申義がござつ  
 て今日態々參上せし手前主人十郎左衛門事性來短慮の



質にして荒々敷振舞故先代十郎左衛門其行末を案事末期  
に手前へ御遺言我亡後に仲事若道成ざる振舞有ハ身に替  
て異見を頼むと家來の身共へ御頼み故御死後に度々御異  
見せし事は迄數度に及び一が過日黒鷲宮太夫が櫻川との  
立會を以ての外成騷動起り漸々事と相成と雖共主人の  
其事深く恨み此尻押の長兵衛が我に敵對者成連一度意恨  
を返さんと専ら朋友進藤野守殿と御内談是ある由内外で  
逢ハ名に一負八万疋の其内なれば間違ひ等も有まじが殊  
に奇なハ屋敷方何と名を附長兵衛殿を迎ひに參るまい  
でもな一其時何卒御不在にて御他出に成されば誠に以て  
手前の幸福主人の仕合せ此義御聞濟被下様御願ひ申上  
ると主人思ひの主膳が頼み長兵衛の困ト果未だ御目通り  
に上らぬ御屋舖上の等ハなけれ共若御人の有た其時の御  
斷りを申上ると是にて主膳の案堵の思ひいそ々屋敷へ歸  
る跡入違ひて倉橋庄九郎連是も水尾の用人にて白柄組の  
其二八門口ハ長兵衛と面會て上座へ通り余の義にも有

ざるが我主人十郎左衛門當時名高き幡隨の長兵衛殿に近  
附がてら幸ひ庭の藤の盛に一献上度存する故御同道を願  
度と主人の申附成と詞も終らぬ其内に極樂十三初めと一  
て町奴共聞耳立是の定め一子細の有事此方等親分の供を  
な一盤固をなさんと立掛るを又長兵衛の子分を制し前に  
主膳の頼みの有と此儘行ぬ其時の批與未練とささせられ  
男達の名をれ故先鬼も角も事穩便に殿に面會致さんと袴  
羽織に銀造りの一本差の支度さへどもやら氣遣う女房悴  
子分の者若問違ひの有時の是が此世の別れならんと  
口に言ねと胸一ばい表へ知らせに子分の小吉人殺しの疑  
ひ掛り仮牢に入たる唐犬權兵衛人殺しの櫻川と言事明白  
に譯り煙草入の言譯立今出牢に成所と知らせに子分の迎  
ひにも又親分の見送りもどつ追つする門口へ早唐犬權  
兵衛の息せき來り長兵衛に一部始終の挨拶終り水尾の屋  
敷へ行事を聞てどふやら心に掛り此唐犬を替りに遣て賞  
以度其譯の外成す軍で言ハ長兵衛と水尾の敵と味方にて

向ふの陣へ踏込で詞戦ひ鎗合せ一軍仕た其上で討死を  
た事ならば後詰り親分出馬して骨を拾つて貨ひ度と兄弟  
分の義を結び一權兵衛が立派な詞長兵衛添けなく思へ  
共一旦使ひの侍に行と請合遣たからハ自身に行ねハ男が  
立ぬと義強き詞聞女房テモ通れな其詞能言て下され一ぞ  
此身も行を留度けれといくら女房が止め一連止らぬ氣性  
ハ此年月連添故に知つて居れば口へも出さず言形も着物  
を着せる胸の内どの様にせつない事か此身の免もあれ悴  
の長松こなたが可愛思ふなら唐犬殿の詞に附て何卒止て  
下されと櫻川の母諸共頼めと用ひぬ長兵衛の兄弟分のよ  
一みを思ひ水野の屋敷へ權兵衛が命を捨に行うと言志一  
ハ通れだ夫でこそ達師の了簡反古にハされぬこなたの異  
見就てハ女房お時が頼み只の者なら皆の詞を用ひなけり  
やア成ぬけれど人に知られた男丈命を惜んで代りに遣て  
ハ第一出入屋敷へ知れても翌から面が合されぬ此身の名  
前のそたりに成故止まる譯にハ行難一と切て放せ一返答

に唐犬初め女房子分今ハ取附島もなく腕こまぬひて居る  
内に猶豫の出來ぬと長兵衛の行んとなすを悴の長松袂に  
すがり涙聲何卒一所に行たいとすがるを拂う勇氣に達者  
で居るよ一言が此世の別れ聞の夜の聞き地獄の又の中  
急いでこそハ行過たり此件にて舞臺廻る  
水尾屋敷廣間の場前件同日の事にて近臣蛇山運八疋田  
千平毛倉穴藏戸蔭滑六杯皆腹臣の者爰に集ひ今に長兵衛  
是へ來らば豫て仕組たる殿の思一立必各心得たるかと  
叩合て待所へ近侍の案内に連らきて花川戸に住塚本長  
兵衛是と一時に奥の間ハ水尾十郎左衛門出來り双方初見  
參成一禮な一而して後に十郎左衛門扱今日貴殿を呼ハ  
我庭内に咲満たる櫻を肴に御近附がてら一献上んど御招  
ぎ申た夫腰元申附一酒肴の用意宜敷かと御次へ通せハ夫  
々に運ぶ酒肴もかれこれと所狭一と並ぶれば水尾ハ此日  
の亭主役四方山の物語りに數刻を費や一進むる酒長兵衛  
ハ事共せず受る猪口さる根の有事と上への酔と心中ハ由



近臣も何と詮方無りしが酌を取んと成折に態と  
酒を落し長兵衛が袴が羽織へ掛しを腰元が介抱な  
し十郎左衛門家來が鹿忍を平に詫定めし心地悪かりな  
ん腰元共に仕末をさせん先其間御身に幸ひ風呂が沸て  
居れば汗を流すが能らんと案内させて長兵衛の廊下通ひ  
に付て事件にて舞臺廻る

同家廊下續き湯殿の休早日も西へ入相の豫て合圖やえた  
りけん案内を方に長兵衛が浴衣を着替來たる湯殿の邊へ  
住居を合圖し近臣の者一時に長兵衛に組附を柔術を以て  
右左手もなく投げ一問十郎左衛門鎧引提出て大音  
上是迄數度の喧嘩を白柄組と町奴の双ひ又敵同様に遺恨  
に思ひあつたるも水に流して今日も長く悪意を結ばんと  
酒宴を催し招きしが酒興に乗つて柔術の試合を只今望み  
しがいかゞ家來が未熟成進眞の當身で殺すと云ひ不屈至  
極のところが振舞最早樹辨相成ねば一旦結びし信友の因み  
を斷切其方が命今日只今此所で置土産に致して參れと鎧

差附て身構へれば長兵衛の驚かず如何も足下へ差上る  
と兄弟分や子分の者が止るを利す只一人迎ひに應じて山  
の手へ流れる水も逆昇る水尾の屋敷へ出て來た元命  
の捨る慶期百迄生るも水子で死ぬも持て産れた其身の定  
業批興に入手に頼まずと貴様が初手から呉るといやア名  
におゝ天下の御旗本八千石の知行取相手に取て不足が無  
寄麗に命を進せるから度胸の居つた此胸をすつぱりと突  
せへと胸くつろげてわるびれず然らば最早是迄と進藤も  
立出て鎧と刀で打合る長兵衛の浴衣の儘手に持進り何も  
無有合小桶追取て受つ流しつ飛蝶の如流石一人に血氣の  
三人所詮長兵衛叶難く鎧の穂先へ掛たる件にて舞臺廻る  
同邸内天満宮祭禮の休唐犬並びに極樂十三其他子分の人  
々が長兵衛の死骸を渡せと早桶たづさへ押掛る折柄上  
御手が廻り水尾進藤諸共に嚴敷咎め受たる人殺せし天命  
にて子分の者迄其場を訴へ出る件にて打出し

明治二十年八月五日御届  
同年同月 日出版  
編輯并 日本橋區蛸壳町三丁目十一番地  
齋藤 長八  
出版人

(定價金八錢)